Café des 三浦一族 open

Menu　第１４回

佐原義連と源頼朝

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館　郷土資料室）

佐原義連(よしつら)は、三浦義明の子で佐原流三浦氏の祖として知られます。義連の名を知らしめた出来事が、一ノ谷の戦い（寿永３年〈1184〉２月）における鵯越(ひよどりごえ)の逆落しでの活躍です。近年の研究では虚構の可能性が高いと指摘される鵯越の逆落しですが、『平家物語』によれば、義連は自ら前に進み出て、三浦で狩りをする時はこれよりも急峻なところを駆け巡っているので自分に続けと言い、源義経らと共に坂を駆け下ったとする武勇が伝えられています。

義連は源頼朝の寝所警固をつとめた11名の中の1人で、頼朝に近侍していたことでも知られます。当時、頼朝の寝所近くに仕える事ができた御家人は、その中でも特に弓矢に優れ頼朝からの信頼がとりわけ厚かった者だけでした。頼朝は建久4年（1193）3月、那須などへ狩りに出かけた際、弓馬に熟練し隔心のない人々を22人選び従者としていますが、義連はこの中にも名を連ねており、ここでも頼朝の信頼を得た存在であったことが確認できます。『吾妻鏡』には、頼朝がなぜ義連を高く評価したのかを示すエピソードが残されています。養和元年（1181）6月19日、頼朝は納涼散策のため、三浦を訪問しました。この時、三浦義澄を中心に三浦一族をあげて頼朝への特別なもてなしを行いました。酒宴の際、同一族の岡崎義実は頼朝の水干（すいかん／鎌倉時代以後、武家が着用した礼装の一種）を所望し、頼朝はこれを与えました。しかし、これを見ていた上総広常はとてもねたみ、そのような美服は、自分のような者にこそ与えられるべきで義実のような老人に与えられるべきではないと言い放ちます。これを聞いた義実は激怒し、両者は乱闘寸前となります。この時、義連は義実に対し叱りつけ、どうして義澄が懸命に準備につとめているのに言い争うようなことをするのかと諭し、広常に対しては、今の振る舞いは礼を失するものであり、言いたいことがあるならば別の機会にするべきで酒宴を妨げることは全く理由のたたないものであると制止したといいます。広常については、この酒宴の前にも、頼朝の前を通過した際、下馬をせず会釈のみを行うという無礼な態度を取っていたため、控えていた義連が下馬するように広常に注意を促していました。広常はこれまでそのような礼を取ったことはないと言い、義連の要求をつっぱねましたが、こうした一連のやり取りを見ていた頼朝は、義連を大変気に入り、信頼を置くようになったとされます。

佐原義連（『前賢故実』）
〈横須賀市自然・人文博物館蔵〉

また、文治5年（1189）4月18日、北条時政の三男が御所で元服しますが、この際、頼朝はその加冠役を義連に命じます。しかし、義連は自分よりも身分の高い者が居並ぶ中、恐れ多いことであるとし、一旦は辞退を申し述べます。しかし、頼朝には先の義連が広常らにとった対応が大変印象深く残っており、また妻の政子もこの三男にとりわけ情をかけていたことから、頼朝はぜひ将来にわたり義連を庇護者としたいと述べました。こうした頼朝の意を受け、義連は加冠役を引き受け、三男は義連の一字をとり、時連（のちの北条時房）と命名されました。この加冠役を務めたいと思っていた者は多くいましたが、頼朝がその場で義連に決めたので、希望していた者たちはどうすることもできなかったといいます。このような出来事からも、義連がいかに頼朝から信頼されていたのかが窺えます。

こうしたこと以外にも、『吾妻鏡』には、頼朝と義連との具体的なやり取りを示す逸話が残されています。建久４年（1193）9月、北条義時の長男（のちの泰時）が伊豆で小鹿1頭を射止めました。義時は、これを携え御所に参じ、矢祭の餅(やまつりのもち)を準備します。矢祭の餅とは、武家の男児が初めて獲物を射止めた際、山の神にお供えした3色（黒・赤・白）の餅のことを指し、これを食す際には、低い矢声を放って食したとされます。御所内の武士の詰所にやってきた頼朝は、その儀式の前に、饅頭を供えて3人の武士を召し、これをやってみさせました。最初に食した武士は、1度目だけ声を発し、2度目、3度目は声を発しませんでした。また、3番目に召された者は、3度食し、一度も声を発しませんでした。そうしたなか、2番目に頼朝から召されたのが義連でした。義連は、3度食すたび、毎回声を発したといいます。各々作法が異なっていたことに頼朝は感心し、その後、盃を交わしました。

以上のように、頼朝から厚い信頼を得ていた義連ですが、その没年については諸説あり、明確ではありません。しかし、『吾妻鏡』建永2年（1207）6月24日条には、「義連卒去之後」との記述があることから、少なくともこれ以前には亡くなっていたと考えられます。義連の墓と伝えられる廟所は、岩戸の満願寺に残されています。

参考文献：『新横須賀市史　資料編　古代・中世Ⅰ』（2004年）同市史『通史編　自然・原始・古代・中世』（2012年）